

---

# さらば、初恋。

霧谷香住

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さらば、初恋。

### 【Nコード】

N9620A

### 【作者名】

霧谷香住

### 【あらすじ】

菜々は、高校卒業を前に、長い間片思いをしていた三島に告白した。…が、見事玉砕。それから気まずくて三島を避けているうちに、卒業の日を迎えてしまった。

高校卒業の一週間前。私はフラれた。

『ごめん。俺、お前のことそんな風に思えない』

メールでの告白。

五年越しの恋は、ものの五分後の返信で打ち砕かれた。

奴、三島健一は、私、原田菜々の、初恋の相手だった。

三島は、中一から高二まで、同じクラスで、やたらと私と縁があった。同じ委員だったり、部活が同じバスケで、キャプテンをやっていたり。いわゆる腐れ縁だった。

『また原田と一緒にかよ』

『それはこっちのセリフ！ 私の行く先行く先に現れないでよね！』  
『誰がするかよ』

そんなやりとりが、しょっちゅうだった。

なんていうか、喋る時はほぼ毎回喧嘩腰で（私が一方的にだけど）色んな言い合いがほとんどだったけど、それだけじゃなかった。ちやんとまともな話もすることがあって、中でも一番覚えてるのは、中二の夏休み、部活帰りにたまたま一緒になって、話してた時のこと。

『なんつかさあ、いいよね、男子は。ちゃんと部活できててさ』

先輩が引退して、私がキャプテンになりたてだった頃、私は色々思うところがあって、三島にそうやってこぼしてた。

『何で。女子だって部活やってんじゃない』

『そうじゃなくてさ。なんていうか、みんな覇気がなくなっただって  
いうか…部活に対して淡泊になってるところあるんだよね。部活を  
したくてやってるっていうんじゃないくて、単に部活が予定にあるか  
ら来てやってるっていうの？』

『なるほど。やってるってより、やらされてる。みたいな感じが』

『そう！ まさにそれ！ 先生が居ない時なんか、手抜きまくって  
んの。特に二年。それが一年にまで伝染してきてんの。注意しても、  
その場だけですぐにだらけるし…』

『分かる分かる。確かに上がしつかりしてないと、下はもっと手を  
抜くよな。注意したらしたで、先輩達だってやってないじゃないで  
すか。』とか言いやがるんだよね』

『そうなんだよね…だから注意しづらいし…』

『しづらいつて…それじゃだめだろ』

三島はその時いきなり怒ったような口調になった。

『原田がそんなこと言ってどうすんだよ。お前がキャプテンなんだ  
ろ。お前が言わなくて誰が言って聞くんだよ』

『キャプテンだからって偉そうにしていけないじゃん』

その時私は、誰にも言えないため込んでたものを三島に言って

た。

不安とか、苛立ちとか、自分のやり切れなさを、三島に吐き出していた。

『…俺は、そんなん気にしてねえよ。だから部員には思ったことちやんと言ってるし』

『…男子と女子は違うんだよ』

『違わねえよ。俺は、自分が間違ってると思わねえから言ってるんだ。原田だって何も間違ってるないだろ。ちゃんと部活したいって思うのは当たり前のことだ。それを言わねえと何にもなんねえよ。…何も言わないで分かってくれなんて都合よすぎるぞ』

『分かってるよ。でも…なんか言ってるので反感買ったらそれこそ部活できなくなるし』

『だからってこのままでいいのか？ 何も言わないでウジウジしたまま続けていいのか？』

『…よくないよ。でも、どう言えばいいか分かんないし…』

『思ったまま言えはいんだよ。原田が嫌だと思っこととか、どうしたいのかとか…ちゃんと伝えようとすれば伝わるよ』

『…うん』

それでも、私には自信がなかった。

『何だよ、らしくねえなあ。お前はいつも女のくせに俺に食いかかって来んじゃねえか。その勢いはどうしたよ?』

『ひどっ！ 私だってねえ、女の子なの！ 人並みに悩んで落ち込むことだってあるんだからね!』

『そうそう。それでこそいつもの原田だ』

三島は、満足そうに言った。

『心配すんな。原田は何も間違つてない。もし、お前が全部ぶつけてだめだったら、特別に男子の方で受け入れてやるからよ』

その時の三島の言葉が、泣いてしまいそうになるくらい嬉しくて心強かった。

三島のおかげで、私は皆に思つてることが言えて、みんな、すぐに分かつてくれた。初めからこうすればよかったんだってくらい、あっさりと。

あの時から、私は三島にだけ、本音で、素の自分を見せられるようになった。そして、それまで男の子になんか全く興味なかったのに、三島のこと、好きになった。

高三になって、初めてクラスが離れて、部活も引退して、三島と話す機会が少なくなった。しかも、久しぶりに話した会話の内容は、スポーツ推薦で地方の大学に受かったということだった。

卒業したらもう本当に離れ離れになる。だから、悩みに悩み抜いて、最後に三島に告白した。

分かってた。どうなるかなんて、考えるまでもなかった。あいつが私のことを、女として見てるはずなかったんだから。でも、思った以上にショックだった。

結果は分かってたはずなのに…

その後、メールの返信に対して

「そっか。わかった。あんまり気にしないで！ 伝えたかったただけだから。これからもいい友達でいようね！」

って、返そうとしたけど、送信ボタンが押せなくて、そのままだ。

学校でも顔を合わせないように、警戒しながら一週間を過ごして、ついに、卒業の日を迎えた。

「先輩！ 卒業おめでとーございまーす！」

卒業式が終わって、部室前で女子バスケット部が集まって、後輩から花束や色紙、プレゼントをもらった。

「ありがとー！ また遊びに来るからね」

「はい！あ、先輩達、春休みに皆でどこかで先輩たちのパーティーしようって話してたんですよ」

「あ、いいね！ しよしよ！ もちろん奢りだよね？」

「え！？ それはちよつと…」

「あははっ！ 冗談だつて」

後輩達と雑談をしながら、高校時代最後の時間をかみしめていた。それは、他の部も一緒に、部室前には、かなりたくさんの生徒がいた。

その中には、男子バスケの奴の姿も……  
でも、私は見ないようにした。

「ねえ、菜々。いいの？ このままで」  
そろそろ行こうかとしてた時、同じバスケ部で副キャプテンをやつてた優に言われた。

「え？ 何が？」

「三島のこと！」

優にだけは、私が三島を好きだつてことを話してた。もちろん、告白してフラれたつてことも。

「あんた、ずっとあからさまに三島のこと避けて…全然喋つてもないんでしょ？ いいの？ 卒業したらもう会えないかもしれないんだよ」

「…分かつてるよ。でもいいの。私は言うだけのことは言ったの。だから、もういい」



『初恋は実らない』

そっつうのは知ってたし、私の恋も、そのセオリー通りになっただけ。

それに、言えずに終わったよりはよかった気がする。これで心置きなく、次に進めるから。

「菜々さあ…三島に告るかどうか悩んでた時、言ってたよね。『どうせ断られるんだし、それなら何も言わないで今のままの方がいい』って。それでもちゃんと言ったんでしょ？　なのにこのままだったら本当に前みたいに戻れなくなるよ。それでいいの？」  
優は痛いところを突いてくる。

そうだ。私は、三島に告白したら、私たちの今までの関係が崩れるかもしれないと思って、それは嫌だと思ったのに、三島に告白した。どうせだめだと分かってて、それでも言った。

実際、このままだと、もう三島と話すことはないと思う。

「そりゃあさ…正直なところ嫌だけど、今更戻るなんて無理じゃん。だから、いいよ。このまま会わない方が、すんなり忘れられるだろうし」

「…三島は嫌だと思うよ」  
優は神妙に言った。

「三島は菜々の気持ちにちゃんと正直に伝えてくれたんじゃない。それなのに菜々がそれだったら三島に対して失礼だよ。今のままでどうしたらいいのか分からないのは、三島の方だよ。ちゃんと三島の

気持ちも考えなよ」

三島の気持ち……

三島は、多分、私のことを女友達とか…もしかしたら、単に中学からの同級生で腐れ縁の奴としか思ってたと思う。そんな奴にいきなり、ずっと好きだったとか言われたら、三島だって、どうしたらいいのか分からないよね…。もしかしたら、三島に変に氣に病ませてるかもしれない…

「…そうだね。私が、ちゃんとしなといけないんだよね。…うん。私、ちゃんと三島に話してみるよ」

私がちゃんと白黒つけよう。フラれたけど、せめて今までみたいにも何でも言い合える仲でいたい。友達だって、構わないから。

「うん。頑張れ！」

優は、力強く言ってくれた。

うん！頑張ろう！

私は、男子バスケット部が集まっている場所へ行った。三島は、一番背が高いからすぐ分かる。

「みつ…三島っ！」

三島を呼ぶ、その三文字の声が震えた。こんなのは、初めてだった。

三島はすぐにこっちを向いた。

「…原田」

私を見て、三島は驚いたような、何にしても、見たことのない顔をしていた。

「あの…その…は、話があるんだけど……………」

やばい…いざ何言えいいのか分からない…。

「えっと…」

言葉が、出てこないっ！

「じゅめんっ！」

私は、耐えられなくて、その場から、走って逃げてしまった。

ああもつつ！ 何してんの私！ 何逃げてんの！ でも、今更何を言っているのか分からないんだよ！

私は走りながら、自分に対する叱咤と言いつつ繰り返していた。

「…田！ …原田！」

後ろから、声がした。振り返ると、三島が走って追い掛けてきていた。

「なっ…何で追い掛けてくんの！」

私は走りながら叫んだ。

「原田が逃げるからだろ！」

三島も後ろから叫んできた。

「逃げるから追い掛けるなんて、あんたは熊か！ ていうか逃げないし！」

「逃げてないなら止まれよ！」

「やだっ！」

「…っんのヤロツ！」

三島は、どんどん距離を詰めてきて、私の真後ろについた。

「ちよつとっ…こつち来んなバカ！」

「お前にだけは…言われたくねえって…の！」

三島が私の腕を掴んだ。いきなり後ろに引っ張られて、転びそうになるのを必死に堪えた。

「…放せっ！ バカ！」

私は、三島の手を振り解こうとした。

「だから、お前には、言われたく…ねえ…」

走ったせいで、三島は前屈みになって、息を乱していた。私も、いきなり止まったせいで心臓がバクバクしている。

やみくもに走って立ち止まったそこは、裏庭だった。誰もいなくて、静かだった。

お互いに暫く何も言わないまま、呼吸を整えていた。そして、三島が私の腕を放して、体を上げた。

「俺も、お前に言いたいことがあったんだよ」  
手の甲で額の汗を拭いながら、三島が言った。

「あのメール…なんか…いきなりで、どうしたらいいのかわかんなかった」

やっぱり、そのこと…。

「いいよ！ そんなの気にしないで。もう、忘れていいから」

今ここでまたフラれるなんて、「冗談じゃない。

「忘れられるかよ！」

「え…？」

三島の言葉に、私は面食らった。

「俺、お前が俺のことそういう風に思ってたなんて考えもしなかったし、全然気付かなかったし…」

…そりゃ、気付かれないようにしてたし。いくら三島の前では言いたいことが言えるっていても、こればかりは隠してきたんだ

よ。

「お前が俺のことを、って知って、色々想像してみたんだ。…そして…」

そしたら…？

「全っ然想像できん！」

三島はやたらと力を込めて言った。そして私はやたらと強く頭をブン殴られたような衝撃を食らった。

神様…懺悔致します。今、私は少し期待しておりました。漫画でよくあるような大どんでん返しが起こるのかと、少し浮かれていました。

実際そんなこと、あるはずごさいませんもんねっ！

「なんていうか、もし、俺と原田が付き合うことになったら、デートしたり手繋いだりとか…お前とはそういうの全く想像できねえ！」

そこまで言ってくれちゃいますか…

「悪かったなあ！ 私だってそんなの想像できないし、したくもないし！」

「…何だよそれ。矛盾してんぞ」

「そうだよ！ 矛盾してるよ！ でも…それでも私はあんたのことが好きだったの！ しょうがないでしょ！」

私は、勢いで初めて面と向かって、三島に好きだと言ってしまった。

ものすごく、死ぬほど恥ずかしいっつ！

「お前：そんなこと言う奴だったか：？」

ぽかんとした様子で、三島は言った。それがかなりムカついた。

「あんたはっ……人の傷口えぐって塩擦り込むようなことばっか言うな！ それだからずっと彼女ができないんだよ！」

「はあ！？ そんなのお前だっ一緒だろ！ つつかお前なんかそのずっと彼女いなかった奴にフラれてんだろ！」

「あんたが言うな！ あんたは私にそう言える立場じゃないっつうの！」

「……そりゃ……そうか……」

三島が妙に納得したような様子で言った。ものすごく間抜けな顔で、それにも何だかムカついた。でも、もうバカバカしくなって、私は何も言わなかった。

「……ぶっ！」

暫く黙ったと思ったら、三島はいきなり吹き出した。

「な……何……」

「……くっく……くっくく……」

三島は、顔を背けて、肩を震わせて、笑いを堪えるようにしながら、笑い始めた。

「何！？ 今の笑うところじゃないでしょっ！」

私は、三島のその態度にまた怒りを爆発しそうになった。

「わ…悪いっ…何かさ、やっぱり原田とは…こうでないとなって、思ってた…」

笑いを鎮めながら、三島は言った。

「え…？」

意味が分からず、私は顔をしかめた。

三島は、咳払いを一つして、真剣な顔になる。

「原田…俺はさ、お前のこと、俺が一番気を許せる奴だと思っている。でも、それは、女として好きとか…そういう風じゃなくて、その…何つつか…人としてっ！ っていうかさ…」

三島は、しどろもどろというか、必死に言葉を探すように話していた。

「付き合うとか…そういう風になると、男と女じゃん。俺は、原田とは、そういう別もんじゃなくて、対等にいられる方がいいんだ。今までそんな感じで、すっげえ楽しかったし…だからこれからもさ、そういうのでいたいんだよ。何でも言い合える親友みたいな関係でいたいんだよ」

…三島のバカヤロー……

「…て、ことは何？ やっぱ私はあんたにとって女として見えてなくて、それどころか同じ男として見てたってわけ？」

悔しい…



「なっ…違うつて！ だから、人としてだつての！」

悔しいよ…

「分かつてるよ。ていうか、もしそこで人としてじゃなくて、何か別の動物だったら、さすがにキレルけどっ」

私は、その時の気持ちを誤魔化すように、冗談を言った。

「だから、それでいいからさ…私を『親友みたい』じゃなくて、ちゃんとあんたの『親友』として扱ってよ…。じゃないと、私は、中途半端なままじゃん」

「…お…おお！当たり前だ！」

三島は、はつきりと言ってくれた。

本当に、悔しいよ…。

中学から一緒だったのに、一度も女だと思われなかったってことと、振り向かせることができなかったってことも、そうだけど…

でも、何より悔しいのは、私は、三島のそういう、変にいい奴なところが好きだったんだよ…。フラれてからもそういう風に思うなんて…。

「…うん。三島は、私の親友だよ！今まで通りねっ！」

私も、力を込めて言った。

これは口に出して言えないけど、多分、まだ暫くは三島のことを好きだと思う。五年も続いた気持ちをふっきるのは、そう簡単にできないから…。

でも、それぐらい許してよねっ、親友！

「戻ろっ、三島。私ら三年でこれからカラオケ行こっつて言ったんだ」

「ああ、俺らも部員でメシ食いに行くんだ」

部室前に戻りながら、私たちは取り留めのない会話をしていた。以前と何ら変わらない調子で、言いたいことを言っただけで…。フラれた女とつた男だとは思えないくらいだった。

こうして接することができるのは、相手が三島だったからだと思う。

「あれ…」

部室前に戻ってきたら、生徒は皆帰ってしまったようで、男女ともバスケ部の部員はいなかった。

「もしかして、置いてかれた？」

私はそう言いながらスカートのポケットの中の携帯を出した。メールが来てる。優からだ。

『時間かかるみたいだから、先行ってるからね。ちゃんと話つけてからおいでよ！』

優には、一番にお礼を言わないといけない。優に背中押してもらわなかったら、きつとあのまま終わってた。

本当にありがとう。優：

「あっ！」

自分の携帯を見た三島が声を上げた。

「あいつらっ！ 三時までに来なかったら俺の奢りだって…勝手に決めてんじゃねえよ！」

一人でそんなことを叫んでいる。時間を見てみると、もう二時半を過ぎていた。三十分弱で行ける場所なんだろうか…。

「じゃあ俺行くな！」

三島は、慌ただしく鞆を持って、走っていく。

「じゃあな、原田！」

振り向きざまにそう言っ、三島は私から離れていく。

「…三島っ！」

私は、その背中に叫んだ。三島は、足を止めて振り返った。

「またねっ！三島！」

もしかしたら、もう会えないなんてことのないように、私は叫んだ。

「次に会った時に、私が今より可愛くなって、美人になって、あなたの女になってても…私をつったこと、後悔すんなよ！」

今、私はちゃんと笑えてると思う。初恋の相手が、三島でよかつ

た。

「…そういうことは、実際なってから言えよなっ！ つうか、そう言うならなってみせろよ！」

三島も笑いながら返してくれた。

「またな！ 原田。頑張れよ！」

三島は、手をあげて最後にそう叫んで、走って行った。

またな、親友。さらば、初恋。

## （後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。短編に挑戦してみました。私の過去の経験も踏まえてできた作品です。（ノンフィクションというわけではありませんが。）何か感想を頂けたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9620a/>

---

さらば、初恋。

2010年10月31日02時56分発行